

竹内 竹童（たけうち・ちくどう）

1、プロフィール

旧派、日本派の渋茶会、萩原井泉水系自由律俳句会（群青社一群鳥社一鷹の会）など、明治・大正・昭和にわたる多彩な俳歴を持ち、晩年まで創作意欲を示した。

<生没>

1884(明治 17)年 11 月 14 日 ~ 1945(昭和 20)年 1月 6日

<代表作>

『道常無名』

<青森との関わり>

弘前市生まれ。俳句会のほか、地元の柔道界・政界にも活躍し、また錦風流尺八もたしなんだ。

2、作家解説

俳人。明治 17 年弘前に生まれた。本名は助七。兼七の弟、抱甕子(運吉)の甥。少年時代、福井句彦から旧派俳句を学ぶ。39 年前田冬川・柳田柳子・成田夜雨らと渋茶会を興し、内藤鳴雪・佐藤紅緑の選を受け日本派俳句に熱中する。40 年全国行脚の河東碧梧桐が来弘の時は嶽温泉に同行、歓迎句会は彼の柔道場で行われたが、柳子の回想ではその説く新傾向を自覚的に摂取したのは松木星陵だけだった。41 年渋茶会の俳誌「渋茶」が、平民社の後継者兄兼七(無為舎)の肝入りで刊行されると、彼は多くの句や記録文を寄せた。この印刷は平民新聞の廃刊後に造った浩文舎でなされた。第 2 号(夏の号)が風俗壊乱のかどで発禁処分を受けるが、理由が自然主義作家紅緑の翻訳にあったか、官憲の注意人物であった兼七の存在にあったかは決め手がない。しかし秘密裏に回状を付けて回覧された夏の号に、発行者(兼七)または同人の誰かが、該当すると推定する箇所朱の括弧をつけた三作品がある。その一つが竹童のものであった。彼の文は

動的であるが、その写実の中に卑俗さもあつた。「渋茶」が 42 年4月冬の号で廃刊の後、新傾向の分裂(荻原井泉水と碧梧桐の訣別)により、弘前俳人は去就に迷ったが、大正元年来弘した井泉水の説く自由律に赴くことになる。後に、彼もこれに従い、以後層雲弘前支社(群青社)・群鳥社・鷹の会など、会の変動に係わり、後二者では長く編集の責を果たすなど、指導的立場に終始した。

彼の定型句は機略清新の一面があつたが、自由律に入って短律傾向の中で晩年は口語化し、弱者、動物などへの眼にヒューマニズムが感じられる。

昭和 20 年没する。七回忌の 26 年、句集『道常無名』が刊行された。

3、資料紹介

○『道常無名』(竹童句集)

図書

1951(昭和 26)年1月6日

171mm×71mm

昭和 26 年1月6日発行。編者は正田耕之助。下澤木鉢郎装丁。刊行は群青社(青森市長島町 45 正田方)となっている。大正6年以後の自由律句のみ 1650 句を収める。巻頭に荻原井泉水の悼句、成田夜雨の跋文を載せる。